

## 第1章 序 論

厚生省人口問題研究所の予測によれば、65歳以上の高齢者人口は1990年に11.9%であったものが、2000年には16.3%、2020年には23.6%、2040年には24.2%と着実に増加し、将来は人口の四分の一を高齢者が占めることになる。高齢化が進めば、高齢ドライバーの割合は必然的に大きくなる。しかも、高齢ドライバーの運転断念率が低いことから、街には高齢ドライバーの乗った車が溢れるようになる。特に、公共交通機関の未整備な地方都市では、運転断念後のモビリティの確保が難しいこともあり、高齢ドライバーは大都市以上に増加すると思われる。

高齢ドライバーは視覚機能や処理判断・運転機能の低下から、法定速度以下の低速運転や車間距離を長くとるなど安全運転志向が強い。一方、ほとんどの一般ドライバーは法定速度をオーバーして走行しており、このような交通状態の中に法定速度以下で走行する低速車が混入すると、追従する一般ドライバーは大きな心理的ストレスを受け、いつもイライラした心理状態に置かれることになる。そのイライラした心理状態は、『中央線に寄る』、『警笛を鳴らす』、『パッシングをする』、『追い越す』などの交通行動や心拍数の上昇という形で出現することになる。

そこで、本研究では、低速車が混入した場合に、追従する一般ドライバーがどの程度ストレスを感じるかを『追い越し行動』を観測したり、生理学的指標の一つである『心拍数の変動特性』を計測することによって明らかにする。さらに、本研究の成果を踏まえ、道路構造の改変や法定速度の見直しについて検討を加える。